

まちづくり委員会代表者会議報告

I. 開催場所、日時、参加員数

長野県 小布施町公民館 6月4日（水）14時20分～5日（木）12時 55名参加
〔視察内容〕 まちとしょテラソ、栗が丘小学校（オープンガーデン）
小布施町並み修景事業、平松農場

II. 内容

～1日目 6月4日（火）～

1. 開講挨拶

UA ゼンセン 杉山常執

主な内容

- ・小布施のまちは、住民が主体となったまちづくりを進めていることで全国的に知名度が高い。今会議では、小布施町のまちづくりにおけるキーマンである方々からの講演やお話する機会を設けた。限られた時間であるが、小布施のまちづくりを体感していただき、今後の活動におけるヒントを持ち帰っていただきたい。

2. 講義「住民が主役のまちづくり」

小布施堂社長 市村 次夫氏

主な内容

- ・かつての小布施は、他のまちと同様、過疎化に悩む、郊外の一自治体であった。1976年の北斎館オープンを機に、むやみに観光地化するのではなく、「そこに住んでいる人が心地よく感じるまち」を目指し、1980年以降、小布施らしさを重視した「町並み修景事業」や、町民参加による「小布施オープンガーデン（個人宅の庭の公開）」等に取り組んできた。
- ・こうした流れの中、「住民一人ひとりが今できることに参画する風土」が根付いていった。2003年から開催している「小布施見にマラソン」は、小学生からお年寄りまで、町民一人ひとりが、自分の出来るかたちで運営やサポートに参加する手づくり感が人気を博し、8000人を超すランナーを迎えるイベントとなっている。
- ・小布施は、その歴史の中で、人と人とのつながり『交流』を大切にしてきた。町立図書館新設に向け、その在り方を検討するワークショップは住民参加の下、53回開催され、この声をもとに、子供からお年寄りまでの「交流の拠点」となることを目指した、他には例を見ない特徴を持つ図書館「まちとしょテラソ」が生まれた。
- ・居心地のよいまちには、自然と人が集まってくる。現在、小布施は年間120万人（人口の百倍）もの観光客が訪れるようになった。しかし、それに対応して大規模なホテル等を乱立させては、小布施の考える「住民が心地よく暮らせるまち」とはほど遠いものになってしまう。何よりもコミュニティを大切に、人間らしい生活を送ることのまちづくりが大切である。

3. 小布施町内視察

市民ガイドによる解説のもと、町営図書館（まち図書テラソ）、町並み修景地区を視察。その後、北斎館を見学。

4. 夕食懇親会

小布施のまちづくりにおけるキーマンの方をお招きし、懇親を深めつつ、まちづくりについての情報交換や、今後に向けたネットワークづくりを行った。小布施町からの参加者は以下の通りである。

市村 次夫様	(小布施堂社長)
花井 裕一郎様	(前まちとしょテラソ館長、NPO オブセリズム代表)
桜井 昌季様	(桜井甘精堂社長 小布施文化観光協会 理事)
市川 博之様	(松葉屋社長 小布施文化観光協会 会長)
木下 豊様	(文屋代表 小布施文化観光協会 理事)

～2日目 6月5日(木)～

5. 視察・講義 小布施町の名産「栗」づくりにかける想い 平松農場 代表 平松幸明氏 主な内容

- ・小布施で栗が栽培され始めたのは室町時代。 朝晩の気温変化が激しく、開花時の天候がよく、水はけのよい扇状地、さらに、酸性土壌が香りと甘さのある栗を育んだ。 治水と食用にと植林が進められ、江戸時代には年貢栗として納めるほどになりました。過去から、栗は小布施で長い間、作り続けられており、その歴史をきちっと守っていきたいと思っている。
- ・一方で、栗は他の果実と比べ、単位面積あたりの収穫量や売り上げは低いため、栗の木を大きく成長させ収穫量を上げるという選択肢もあるが、あえてそうしないようにしている。それは、品質を守っていききたいからである。
- ・現在、インターネットで販売も行うことで、直接、消費者の声を聞く機会が増えた。その中では、栗が美味しい、美味しくないという声はもちろんであるが、小布施の栗が好きというファンが大勢いることを嬉しく感じるとともに誇りに思っている。
- ・栗の美味しさを高めるためには、環境や土壌をコントロールするとともに研究機関を通じ把握した、窒素、ミネラル等の栄養条件を最適な状態にすることに努めているが、微生物の働きについての調整は大変、難しい。突き詰めていくことは必要だが、自然の環境のもとでの適度な加減が必要と感じている。
- ・栗の香りは、よく言えば繊細、悪く言えばにおいがしない。果実は甘さを高めたものに人気があるが、甘みを追求しようとは思わない。ほのかな香りの中で感じる小布施の栗をこれからも作っていく。
- ・栗の生産は収入面で、他の果実と比べ、決して割はよくないが、小布施の栗づくりを脈々と受け継いできた人々やまちに対する意識を高めてきた人々など、小布施の知名度をあげてきた先人の取り組みや想いを絶やしてはいけないと思い、責任とやりがいをもって、栗づくりを行っている。そして、後世に何が残せるかということを常に意識している。しかし、何かを残すということが目的ではなく、自分たちが住んでいて楽しいまち、来訪された方々が楽しいといっただけのようなまちをつくっていくことが大事ではないかと思い、日々過ごしている。

6. 講義「わくわく演出マネジメント ～まちづくりの中心に図書館を～」

前まちとしょテラソ館長 NPO オブセリズム代表 花井 裕一郎氏

主な内容

- ・まちづくりにおいては、未来に向けた理念を創り、共有することが重要。さらに、その理念の実現に向けては、既存概念を取り払うことがポイントとなる。小布施町では、新図書館建設に向けた住民同士のワークショップにおいて、新図書館を「交流と創造を楽しむ文化の拠点」にするという理念を決めた。これを軸に、議論を重ねていくと従来の図書館の常識とは

違うものが出来上がってきた。例えば、「交流というキーワードがあるのに館内で「会話をしてはいけない」というのはおかしくないか。」「会話をすれば、お茶くらいは飲みたくなるのでは。軽い飲食は可としよう。」「小さな子供は嬉しい気持ちを言葉では表現できずにスキップで表したりする。それならば未就学児のスキップはオーケーとしよう。」「ワークショップやコンサート等のイベントを開催できる場としたい」等々。このような住民ワークショップを53回も重ねる中、「まちとしょテラソ」が形づくられていった。

- ・小布施において「まちとしょテラソ」は情報や人々をつなぐ HUB（ハブ）としての機能を脇役として担っている。この考え方はみなさんの活動も当てはまるのではないか。単にイベントに参加するということだけではなく、脇役として人や組織をつなぐような役割を担うということが重要になると感じる。

7. まちづくり活動事例報告

【新潟県支部】「かやぶき集落の地域資源維持・活性化」

アークランドグループ労働組合 中央執行委員長 中村 弘一氏

- ・柏崎市高柳町「荻ノ島かやぶき集落地区」は、日本でも貴重な「環状集落」様式の美しい農村集落であるが、住民の高齢化により、貴重な地域資源である茅葺き民家の維持困難、耕作放棄地の拡大、伝統行事の存続危機といった様々な課題に直面しているという実態を春日俊雄氏（荻ノ島地域協議会長・観光庁観光カリスマ）をはじめとする地域住民との交流を通じて把握した。
- ・長期的に当該地域の活性化に関わることを前提に、新潟県支部まちづくり委員会と荻ノ島地域協議会との間で、「荻ノ島里づくり活動連携協力協定」を締結。第1回目の活動として耕作放棄地（6アール）を開墾し、加盟組合参画のもと田植え作業を行った。まずは組合員に対し、こうしたイベントを通じて、楽しみながら、地域の課題について学び・理解を深める機会を提供することが大切だと考えている。
- ・今後は収穫物の販売支援、茅葺き屋根維持支援、あぜ道等の整備、伝統行事の維持支援等も視野に、地域との交流・協議を継続していく。

【東京都支部】（1）「震災発生時における一時滞在施設の確保」

東京都支部 俣野 勝敏氏

- ・首都直下地震発生時、帰宅困難者の受け入れとして92万人分の収容施設が必要になると試算されているが、現状、都・区施設、民間事業所等の活用により確保できているのは12万人分に過ぎないことに着目。
- ・現状や課題を把握するため「東京都帰宅困難者対策」学習会を開催（2014年5月15日）。東京都の担当者を講師に招き、①東京都が推進している帰宅困難者対策の理解促進、②一時滞在施設の確保の重要性に対する認識の醸成、③災害発生時のお客様への対応策の確認、④自らの行動のあり方について確認、を行った。
- ・今後は、UAゼンセン加盟の流通サービス関連の企業の取り組み状況を調査し、課題を把握するほか、一時滞在施設の更なる確保に向けて、連合東京に対し、政策制度要求に盛り込むよう働きかける。

（2）「TOKYO ブランドを探せ！～UAゼンセン東京から世界に発信」

- ・東京都支部に集う全加盟組合の参加による「まちづくり運動」として展開し、私たちが暮らし、働くまち「東京」を改めて見つめ直し、再発見する機会とするため、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、世界中から集まる人々に対して自信を持つ

- てお勧めできる、東京ならではのブランドを発掘するコンテストの開催。
- ・応募があったすべてのブランドを提案書としてとりまとめ、行政をはじめとする関係各所に提出していく。

【大阪府支部】「地域ブランド『泉州タオル』の活性化に向けた取り組み」

エイチ・ツー・オーリテイリンググループ労働組合連合会 廣瀬 正之氏

- ・まちづくり委員会において、地域経済の状況や強み・弱みについて分析。中心部と郊外の格差や、商業に比べて注目度の低い地域の1次・2次産業の課題等について議論し、市の財政状況が極めて厳しい泉佐野市に着目。視察・ヒヤリングを経て最終的に、本地域の貴重な産業資源でありながら知名度が低く、また、加盟組合の仲間達が製造に携わっている「泉州タオル」にスポットを当て、そのブランド力向上を図りながら、地域産業の活性化を目指していくこととした。
- ・具体的な活動としてまずは、「泉州タオル」のブランドとその品質の良さを知ってもらう為に、運営評議委員会でサンプル品を配布し、加盟組合への活用を呼び掛けたところ、周年記念品に採用するなどの好事例が出た。
- ・6月9日の運営評議会終了後に「大阪府支部まちづくりフォーラム」を開催予定。タオルの「作り手」の代表としてタオル工業組合の会長、「売り手」の代表として加盟組合の百貨店バイヤー、「使う者」の代表として総合・サービス部門の女性組合役員をパネリストとし、地域産業振興の第一人者である兵庫県立大学の勝瀬氏をコーディネーターに迎え、「地域の宝『泉州タオル』ブランドを広めるための具体策を考える」をテーマにパネルディスカッションを実施する。

【山口県支部】「地域ブランド『大島みかん』の生産・消費拡大、農村と市街地の交流促進」

山口県支部 櫻井 良氏

- ・山口県を代表する特産品「大島みかん」の生産地である周防大島では、農家の高齢化による担い手不足が深刻であり、遊休農地の拡大等の問題に直面している。山口県支部まちづくり委員会では、地域資源である「大島みかん」ブランドの活性化を通じた、周防大島町の交流人口拡大を目指すこととした。
- ・島南西部の瀬戸内海に面した傾斜地にある、手入れの行き届かなくなったみかん畑を、9年間に渡って地元農家から無償で借り受け、3月より、本格的な農作業の開始に向けた整備作業を開始した。
- ・まずは「よそ者」である私たちが、地域の人々に受け入れてもらえるようになることが活動の第一歩であると感じている。組合員参加のイベント等も企画しながら、地域の人々との交流も進めていきたい。

8. 講義「活力ある地域社会の実現に向けた「まちづくり政策」(素案)」について

UA ゼンセン 杉山常執

主な内容

- ・わたしたちが目指す「まち」の姿は、人と人のつながりが生まれ、地域性を活かした「働きがいのある職場があり、持続可能で済みやすいまち」である。すなわち個性や価値観を超えた人と人の新たなコミュニティのもと、独自の伝統や文化を育み、人々が誇りを持って働き、暮らせるまちを形成することが必要である。「まちづくり政策」はこうした考えに立ち、地域を起点に、働く者すべてが人間らしく、心豊かに生きていくことができる社会の実現につなげていくものである。

- ・地域を取り巻く環境については、従来からの少子化による人口減少に、大都市圏への人口流出を加味すると、2040年までに約半数の自治体が消滅する恐れが提起されている。これに加え、超高齢化社会、地球環境・エネルギー問題、財政状況と言った要素が、身近な地域社会のあり方を考えていく上で避けては通れない制約要因となることを理解しなければならない。
- ・労働組合が中心となってまちづくりを推進していくのではない。あくまで地域住民が主役として進めるまちづくりに、私たち労働組合が参画することで、様々な主体が連携するための「つなぎ目」や、活動を促進させる「触媒」としての役割を目指すものである。
- ・まちづくり委員会の活動を通じ、地域との交流を深めていくことにより、地域の将来に向け、住民として、労働組合の役員、組合員として、自分の生き方、働き方、暮らし方をどうしていくべきかを考え、学びや気づきを得られる場としていくことが最も重要である。

9. グループワーク テーマ「小布施町に対する『よそ者』視点での提案」

5班に分かれ実施。視察及び講義を踏まえ、各参加者が、「よそ者」の視点で小布施町に対する提案を考え、それらについて班内で議論の上、各班の代表者による発表を行った。発表内容に対しては、NPO おぶせリズム代表の花井氏より、コメントを頂いた。

主な意見（「→」以下は花井氏のコメント）

- ・「宿泊施設が少ないことが気になった」
 - 小布施は小さな町であり、この中ですべてを賄うのは難しいという考えから、当地域を北信濃というエリアでとらえ、近くにある湯田中等の温泉街に宿泊機能を委ね、「来街者には15時頃まで小布施を楽しんでいただき、15時以降は町民の時間」と言う考え方で30年くらいやってきた。しかし最近、若者達を中心に、「多様化するニーズに対応するためには、ある程度、宿泊施設も必要では」という声が出始めている。その際には大きなホテルを建てるというのではなく、ゲストハウスのようなスタイルがこのまちのスタイルに合っているということで、実際に物件探しも始まっているようだ。
- ・「町民同志だけでなく来街者との交流を考えたとき、例えば「足湯」のようなものが町内にあってもよいのでないか？」
 - 交流を大切にする小布施にとって、こうしたユニークなアイデアを議論しながら、まちづくりを進めていくことはとても大切だ。
- ・「夜に楽しめるような店が少ない」
 - 宿泊客が少ないことに加え、町民の7割が農業に従事しており朝が早いと言うのも、少ない理由の一つだと思う。しかし最近では、Uターンした若者が夜開いている雰囲気の良いお店をオープンさせるなどしており、いい動きだと感じている。
- ・「駅前が活性化しておらず寂しい印象」
 - 車中心の社会の中で鉄道の利用者が減少し続けており、この町の長年の課題となっている。最近では駅前の商店跡が住宅になってしまうケースもでてきている。しかし駅前やはり大事なステータスシンボルであり、行政や商業者達が連携しながら最近ようやく動き見え始めた。皆さんのような「よそ者」の方が声を上げて頂くと大変力になる。
- ・「交流産業ということだが、少し観光地化し始めているとも感じる」
 - 自分たちは交流のつもりでやってきけていても、実際に観光客の方が沢山来られるようになるなかで、知らず知らずのうちに変わってきているのかもしれない。「よそ者」ならではの貴重な意見だと思う。

10. 閉会挨拶

UA ゼンセン 田村副書記長

- ・今回の会議で、わたしたち労働組合が主役では無く脇役として、まちづくりに参画しようという話があった。主役の動きをよく見ながら、いい動きをするプレイヤーとして、自分たちに何ができるかを考えてほしい。その際に組合員、とりわけ女性や若者にこの運動に参画してもらうことが重要なポイントとなると思う。
- ・まずは考えを言葉に出すことが行動につながる。これを繰り返しながら、継続して運動に取り組んで欲しい。

以 上